編　集　後　記

「世紀の発見」、「夢の万能細胞」としてSTAP細胞が華々しく登場したのは平成26年はじめでした。そして論文を執筆した若い女性研究者はリケジョの星として一躍脚光を浴びました。しかし、その11ヵ月後検証実験でSTAP論文は不正と認定され、手元に残った言葉は捏造(ねつぞう)の２文字でした。社会が科学とどう向き合うかを考えさせられましたが、今後につながる展望がないまま葬られようとしています。

病院紀要第53巻（平成26年度）には、総説２編、原著３編、症例報告１編が掲載されています。巻頭は、先端医療センター病院長の平田結喜緒先生の総説「原発性アルドステロン症（PA）診療アップデート」です。２次性高血圧のなかでも最近では最も頻度が高いと注目を集めている原発性アルドステロン症について、その病態、成因、そして診療ガイドラインに沿って、現在の課題と今後の展望を概説し、最後にリスクホルモンとしてのアルドステロンの意義について解説されています。２編目は中央市民病院医療情報部の樋口弘実氏らの総説「情報システム院内開発10年間の取組みと実際」です。2004年から院内職員による医療情報システムの院内開発に着手してきた中で、業務の効率化、医療安全、業務支援などに多くの成果を上げてきた一方で、解決すべき課題や問題点も存在し、今後ともそれらに対応していく使命を述べられています。続く原著３編には、分子標的薬「スニチニブの甲状腺機能に及ぼす影響」についての検討、「導出右側胸部誘導・背部誘導心電図の精度」に関する評価、「禁煙外来の治療成績」が報告されています。症例報告では、リンパ節転移で発見され、最終的に遺伝子検査で原発巣不明の悪性黒色腫と診断された予後不良症例が紹介されています。いずれも興味深い内容で読み応えのあるものです。

お忙しい中、論文や業績を投稿していただいた医師、職員の方々、膨大な編集業務にご協力いただいた事務局の皆様に心から感謝申し上げます。

神戸市立医療センター西市民病院
副院長　原　田　　明